

# 日使頭祭

令和6年4月6日(土)

京都・大山崎の油祖離宮八幡宮において恒例の日使頭祭（ひのたさい）が行われた。桜満開の好天に恵まれ、メーカー、販売業者、関係団体の代表者ら油脂業界から約90名が出席。また総代会、地元関係者も多数出席し、油脂業界のさらなる繁栄や参拝者の無病息災を祈願した。

午前11時開式、献燈や湯立、祝詞奏上、玉串奉奠などの伝統神事が行われた。式神楽、湯立の神事は5年ぶりとなった。

式典の後、本年の日使頭（ひのかしら）を務めた一般社団法人日本植物油協会の新妻一彦会長（昭和産業(株)会長）が油祖離宮八幡宮の歴史を紹介し、「我が国の植物油は初めてこの地で搾油され、かつては燈明として利用され、人々の生活に灯かりをともしてきた。最近では人々の健康維持に不可欠かつ重要なエネルギー源であり、風味・おいしさが評価され食生活に定着している。私ども植物油業界は、植物油という国民の命と健康を守る価値のある商品を取り使う使命を果たすため、直面するさまざまな課題に正面から立ち向かっていくことを誓う」とあいさつを述べた。

この後は、社務所内に場所を移し『直会』を5年ぶりに行った。はじめに崇敬会 木村治愛副会長（株マルキチ会長）が「油屋にとって、離宮八幡宮は歴史と文化の誇りである」とあいさつを述べ、引き続き昭和産業(株)駒井孝哉常務執行役員大阪支店長が「コロナ、原料高、円安とここ数年油脂業界は非常に苦しんでいる。環境変化に即した業界にしなければならないと思う」とあいさつを述べた。その後、全油販連 館野洋一郎会長（株タテノコーポレーション社長）の乾杯の音頭で懇談に入り、関西油脂連合会 木村顕治会長（株マルキチ社長）による油メで散会した。境内では、模擬店や搾油のデモンストレーション、和太鼓演奏や地元の音楽祭が催され、コロナ前の賑わいが戻った。



(写真提供 油脂特報社)